

して全身残留率曲線を描きこれについて検討した。対象は¹³¹I甲状腺摂取率測定患者および甲状腺機能亢進症¹³¹I治療患者である。

結果：1) 診断量(50~100 μ e)投与例、全身残留率曲線は全て急峻に下る第Ⅰ相と以後ゆるやかに減少する第Ⅱ相より成る。投与後24時間において甲状腺摂取率の高いものほど全身残留率は高い。また第Ⅱ相の生物学的半減期は甲状腺摂取率の高いものほど短いようである。また第Ⅱ相を外挿して0時と交わる点の示す%は甲状腺摂取率の24時間値にはほぼ等しいことが判った。2) ¹³¹I治療量(5~20mc)投与例、全身残留率曲線の大半は診断量

の場合と同じように二相性を示すが、少數例に直線型あるいは最初の4~5日伸び減少しないで以後やや急激に減少する型等がみられた。後者の2つの型は甲状腺摂取率が早期に上昇する場合に多いようであった。3) 全身残留率曲線と甲状腺摂取率曲線と対比すると、両曲線の減少が平行なもの(A型)と平行でないもの(B型)が、診断量、治療量いずれにもみられたが、A型の方が多かった。B型では肝に¹³¹Iの多くが停滞することが認められかつこの場合には¹³¹I治療効果が多少悪いようであった。

IX. 甲状腺

座長 脇坂行一教授(京大)

64. 各種疾患における T₃ resin sponge uptake の検討

浅越嘉威、○安部喬樹
(鳥取大学・浅越内科)

甲状腺機能異常者および肝疾患、腎炎、糖尿病について¹³¹I-T₃ resin sponge uptake を検討した。正常者は26.9~37.6%の範囲で、平均32.7±2.5%であった。

甲状腺機能亢進症では38.9~66.9%の範囲で、平均52.2±7.6%であった。甲状腺機能亢進症の治癒後の成績では、24.8~39.8%で、平均33.1±4.3%と正常域、もしくは機能低下の域に下がっている。

甲状腺機能低下症の成績は17.1~26.7%の範囲で、平均22.5±2.6%と低値を示している。単純性甲状腺腫では、27.2~43.2%の範囲で、平均31.8±4.3%であった。

甲状腺機能異常以外の疾患について検討した結果では次のとくである。

肝疾患では、平常者に比べて有意の差はないが広い範囲を示し、20.2~46.2%で平均34.4±7.4%であった。このように正常域より低値または高値をとる原因として、一応病期の差が考えられるが、今回のわたくしたちの成績からは必ずしも一定の傾向は認められなかった。また血漿総タンパク濃度、肝機能成績などの間にも相関関係は認められなかった。

腎炎では27.9~41.0%の範囲で、平均35.3±4.4%を示した。

糖尿病においては28.4~37.3%の範囲で、平均30.4±3.0%と、ほぼ正常域を示した。

65. 産婦人科領域の T₃ resin test の臨床的応用

○吉村克俊、佐藤幸雄
石原祥一、安藤俊雄
<放射線科>
街風喜雄、三宅正明
<産婦人科>(関東通信病院)

1) 健康非妊女子(48例)の平均値は27.6%±3.7で健康男子(31例)の平均値31.8%±3.1に比し推計学的に有意の差で低値を示す。月経周期との関係では月経期は排卵期前後に比し有意の差で低値を示す。

2) 正常妊娠(94例)はかなり低値を示す。これを前、中、後の三期に分け、また月数別に検討したが第2カ月の平均値は24.4%±4.3で低いがばらつきが多く非妊時と有意の差がみられず、第3カ月以降は有意の差で低値17.0~21.0を示す。産褥では上昇し20~30日で正常範囲に回復する。

3) 中等以上の悪阻群(14例)で2カ月27.1%±5.2、3カ月28.8%±6.9であり、3カ月については有意の差で高値を示す。

4) 切迫流産(16例)では平均34.4%±5.2で正常妊娠と有意の差で高値を示す。しかし妊娠経続群と、中絶群との間には有意の差がなかった。

5) 晚期妊娠中毒症(13例)では正常妊娠後期と差がみられなかった。

6) 脇帯血(7例)ではそれに対応する母体血に比し高値を示し、母体の低値に影響されない。